

森田草平

「三四郎」



# 「三四郎」



## 一

「猫」が今から数年前における先生に最も手近な周囲を描いたものだとするれば、「三四郎」は昨今の周囲を描いたものである。「三四郎」が面白いのは主としてここにあるのだろう。もつとも「猫」と「三四郎」とは材料の取扱の上に多少の相違はある。形式の上からいっても、「三四郎」は「猫」ほど無責任にはできていない。した

がって損益するところは有るだろうが、先生に親炙しんしやする方面の観察から成ったものとしては、数ある先生の作物の中でも、「猫」と「三四郎」との二つを挙げざるを得ない。

「吾輩は猫である」の猫の役を勤めるものは、「三四郎」においては、福岡県京都郡真崎村小川三四郎という、今年熊本の高等学校を卒業して、東京の文科大学へ行く青年である。ただし三四郎は人間だから猫ほどその存在を無視せられない。三四郎を中心として、もしくはだいに使って、その周囲を描くというよりは、はじめて東京と



いう新しい雰<sup>ふん</sup>囲<sup>いき</sup>気の中<sup>なか</sup>に投<sup>な</sup>じ<sup>ら</sup>れた三四郎が、その周囲の影<sup>えい</sup>響<sup>きやう</sup>によつていかに生<sup>お</sup>い立<sup>た</sup>つかを描<sup>えが</sup>いたものというほ  
うが可<sup>よ</sup>い。

「三四郎」はその中へ出てくる人物が皆三人称で書かれてある。しかし三四郎の出ない幕はない。三四郎の目に触<sup>ふ</sup>れ耳<sup>みみ</sup>に入<sup>い</sup>るところだけしか、この小説の中には出て来<sup>き</sup>ない。その点から見れば一人称で書かれた物と同じようであるが、作者はあくまで三四郎を視<sup>み</sup>て書いている、視<sup>み</sup>下<sup>くだ</sup>して書いている。三四郎に成<sup>な</sup>つて書いているのでは無い、三四郎の心持も書いてはあるが、それは三四郎自身の心

持として出ているのではない。三四郎よりはぐっと偉い人が三四郎の心持ちを書いて遺つているのである。だから三四郎の心持は一たび作者の批評を経た上で、間接に読者の頭へ映ずる。こんな場合には、読者は作中の人物に同情してそれといっしよに成ろうとするよりは、むしろ作者といっしよに成りたがる。またいっしよに成りたがらざるを得ない。極端に言えば、読者は作者といっしよに成って、主人公たる三四郎を愚にしなければ、この小説の面白味は解わからないと言つても可い。例えば三四郎が汽車の中で広田先生に出逢であう。広田さんが三四郎に桃



を喰わせて、桃は果物の中で一番仙人めいてると言う。三四郎ははじめて聞く説だが、随分詰らない事を言う人だと思ったとある。ここでもし読者が三四郎といっしょに成って、真実に広田先生を詰らないと思うようじゃ、（そんな人も無かろうが）この小説は面白くない。詰らないという三四郎がかえって詰らなく見えるくらいでなけりやいけない。その少し後のところで、広田さんが「お互いに憐れだなあ」と日本人を貶すけなのを聞いて、三四郎といっしょに「どうも日本人じゃないような気がする」ようじゃ、やっぱりこの小説は面白くない。

## 二

これで見れば、「三四郎」はどうしても悲劇に成りようはずはない。悲劇は見物人が我を忘れて、全く主人公の中へ没了して泣いたり、笑ったりして気を揉もむようで無けりや成らぬ。こうして上から見下して書くのは喜劇の行方いきかただろうが、まさか三四郎は喜劇じゃない。「猫」でもその材料を純粹に知的にばかり取扱ったものじゃ無い、よほど感情の分子が加わっていた。一面から見れば

滑稽でも、一面から見れば真面目まじめに考えさせた、ユーモアの作品であった。それが「三四郎」ではさらに感情の要素が強く成ったものと思えば可い。今一步で情緒小説の領分へはいるべきのを、だいぶ湿っぽく成り掛けたところで踏み止まったもののように思われる。つまり「猫」の行方で、だんだん悲劇に近付いて、行き得る極限まで行ったものである。だから上から見下すと言っても、彼ああ言った見下ろし方なら、見下ろされたところでべつだん苦には成らない、腹も立たない、時にはちよつと三四郎に成ってみてもかまわない。いや、始終三四郎に成って、

周囲から軽く弄もてあそばれていながら、そこになんとも言われ  
ない暖かい感じが有って、そこにまたこの小説の面白  
味が有るのである。前とまるで反対な事を言うようだが、  
視方を変えたのだから仕方しかたがない。前のは嘘で、今言う  
のが真実である。

軽く弄ばれるのだから、刺激も弱い。打撃もあまり恐  
ろしくない。好いこともそれほどでない代りに、悪いこ  
ともそれほどでない。盃さかずきの滓かすを乾かさぬ代りに、それ  
が毒で有っても、命まで失う気遣いはない。刺激の強い  
ものばかりこてこて並べるのも容易ではないが、刺激が

あまり強くなく、しかも平凡でない材料をこれだけ集めるのはさらに困難である。さらにその材料を布置按排して、読者を倦うましめないような結構を組み立てるのはいっそうの困難である。たとえば、故国から送って来た金子かねを受取りがてらお談義を聞きに行く三四郎と、お嫁に行かぬかという相談を受けに行くよし子とが、野々宮さんの下宿へ落合って、よし子の口から兄へ、美禰子が文芸協会の演芸会へ連れて行ってくれと言った、その言伝をことづて伝えるのを、傍そばで聞かされた三四郎の地位は面白い。よし子が兄に馬鹿だと言われて、「馬鹿じゃないわ。ねえ、

小川さん」と訴えるのを、三四郎はまた笑っていた。腹の中ではもう笑うのが厭いやになったとある。ユーモアというものもここが極致ではあるまいか。三四郎は周囲から弄もよばれているのが強くは迫らない。感じは暖かい。それでいて、一味の悲哀がある。能よくまあこんな刺激の軽い事柄ばかり寄せて、こんなシチュエーションが作られたものだど驚かざるを得ない。

これは一場の場面のことであるが、全体の結構から言っても、整然として一糸乱れない。そのためにある人には不自然だという感を抱かせるかもしれないが、形式が

気持ちよく整っているので埋合わせをするから、差引同じことだろう。そこでこの小説の骨子と成ってるものは、前にも言ったとおり田舎者いなかものの三四郎が都会の風に触れて、だんだんその世界を拡めて行く具合ぐあいである。美禰子と三四郎との間に生じた不即不離の關係のごときも、一見この小説の骨子のようにには見えるが、実は三四郎がその世界を拡めて行く一階段、一出来事にすぎない。そこで三四郎の活動の情的方面たる美禰子との關係は、まずまず序を遂おうて、場面を重ねる毎に接近して行く具合が、最も自然にかつ明白に描かれている。美禰子ばかりでは



ない、広田先生、野々宮さん、与次郎なぞと親しく成つて行く経路にも申分がない。しかるにその知的方面たる、三四郎が見聞を拡め、修養を積んで行くほうから言えば、だいぶギャップもあり、矛盾もあるように思われる。汽車の中の三四郎とその後の三四郎と較くらべると、逢う毎にまるで別人のように偉く成っている。

## 三

いくら文科大学に席を置いて、広田先生の許へ出入り

したからとて、そう旨くはゆくはずがない。汽車の中で  
 はレオナルドー・ダ・ヴィンチの名に辟易へきえきした三四郎が  
 一か月経つか経たない間に、与次郎とイプセンを上下し、  
 美禰子の家の応接間でバイオリンの遠音を聞いては、カ  
 ソリックの連想があるというような、高襟ハイカラなことを考え  
 ている。もつともイプセンは近ごろ人口に膾炙かいしやしたから、  
 熊本の高等学校でも読まぬとはいえないがダ・ヴィンチ  
 の名を知らないで、カソリックの連想は少し訝おかしい。も  
 つともこの三四郎、趣味はなかなか侮あなどり難い男である。  
 自然に対しても、また女に対しても、趣味の判断は高尚

でしかもリファインされたものである。それでいて、美禰子と一緒に丹青会へ行くと、彼のとおりの朴念仁ぼくねんじんでなるとも言えないんだから齒痒はがいようでもある。他人を批評する場合にも、三四郎は広田先生を評して、「つまり危ない」と言い得るほどに、自分は危なくない地位に立っていれば、あんな男にも成れるだろう。世の中にいて世の中を傍観している人はここに面白味があるかもしれない」と言っ、これを批評家と名付けている。これほど達観した三四郎が次の次ページの頁では、野々宮さんが轢死れきし人に対して、割合冷淡なのに驚いて、「光線の圧力

を試験する人の性癖が、こういう場合にも、同じ態度であらわれて来るのだとは丸で気がつかなかった。年が若いからだろう」とは、どうしても受け取れない。また世辞せじの上から言っても——ま、このくらいにして止めて置く。もちろん順次的の発展を描くのは、情のほうが肝要でもあり、また困難でもあるから、大いに手腕を要する。それがそのほうでは遺漏なく行っていないながら、ちよつと注意さえすれば、作家を俟またずして、誰にもできそうな知のほうでこんな破綻はたんのあるのは、まったくこのほうをネグレクトされたものであるろう。それとも先生のようにな

んでも物を識りすぎた人が知らない者のことを書くと、どのくらい知らないかちよつと見当が付かないので、こんな後や先を生ずるのでは有るまいか。もしそうだとすると、面白い。

三四郎の素養にはこんな矛盾があるにもかかわらず、性格は一貫してはつきり出ている。「電車に乗るがいい」と与次郎に言われて、何か寓意でもあることと思つてしばらく考えてみたが、別にこれという思案も浮かばないので「本当の電車か」と聞直す<sup>あたり</sup>辺は、ある意味において人生に触れてると言わざるを得ない。また広田先生の

書冊を見て、「先生これだけみんなお読みに成ったのですか」と最後に三四郎が聞いた。三四郎は實際参考のためこの事実を確かめておく必要が有ったとみえるなぞも、それで有る。これらは皆観察から来たものであることは争われない。また「三四郎は本来からこんな男である。用談があつて人と会見の約束などする時には、先方がどう出るだろうということばかり想像する。自分がこんな顔をして、こんな事を、こんな声で言つて遣やらうなどとは決して考えない。しかも会見が済むと後からきつとそのほうを考える。そうして後悔する」この辺を讀ん

で、自分の心の中を見抜かれたような心持のする読者は  
少なく有るまい。

#### 四

与次郎の性格は観察から来たものを捩<sup>ね</sup>じ曲げて誇大したものである。野々宮さんもややそれに近い。よし子はあの種の女に対する理想から来たもので、あれに似た女が実際するわけでは無いらしい。まったく創造されたものである。美禰子は知らぬ。唯、<sup>ほか</sup>外の人物は皆この小説



の中の雰囲気に似合った性格で、特別な運命に支配され  
 ない限りは、この作の中で生まれて、この作の中で死ぬ  
 人間のよう<sup>おとな</sup>に思われるが、美禰子だけは打捨<sup>うっちゃ</sup>って置いて  
 も温和<sup>おとな</sup>しくこの作の中で終始する女とは思えない。最も  
 列<sup>はげ</sup>しい舞台を別に持っている女である。それをこの作の  
 中で片が付くように書いてあるのは、形式を重んずる作  
 家の用意に外ならぬ。末尾に至って、ゆえもなく美禰子  
 を奪って行く妙な男があるが、実際彼何者ぞやである。  
 あの男はただ小説の結末をつけるために、不意に追剥<sup>おいはぎ</sup>の  
 ごとく顕<sup>あ</sup>われたように見える。実際の世の中では彼様<sup>あ</sup>し

た終局を見ることが間間あつて、あのほうが自然かもしれないが、少なくとも作品の中では不自然だと言わざるを得ない。これがどうしても読者の腹へ落ちないから、せつかく広田先生の夢語りも、夢そのものとしては面白いが、なんだかメークシフトのような気がして成らぬ。しかし形式の上から言えば、この小説の中で起つた出来事が皆片付いて、でき上がった美禰子の肖像の前に、この小説に関係の有つた人間が皆集まつて幕を閉じるのだから、ほとんど思い残すところは無いはずである。それでいてどこか物足らない。

「三四郎」ばかりでは無い。先生の作を読む毎に、いつも結末が物足らぬ。「虞美人草」然り<sup>しか</sup>である。「草枕」然りである。「野分」もそうである。そのほかたいいていそうである。それもそのはずである。あまり形式の上で手際よく纏<sup>まと</sup>めてあるのも、そんな感じのする一つの原因であろうが、一つは作そのものの性質から来るのである。何しろ結末を円満に、さなくもあまり悲惨でないように納めようというのだから、悲劇のキヤスタストローフなぞということには興味を持っていないのだから仕方がない。文学論の中を見ても、悲劇なぞに興味を持つ輩<sup>やから</sup>は

根もなき苦痛を弄ぶ贅沢屋だと書いてある。もちろんこんな粗末な議論ではないが、ともかく余り好意を持つちや書いてない。苦痛を苦痛として斥しりぞけ、不知の世界を不知として切捨てることは先生の思索に特有なる傾向である。

いずれにしても悲劇はまず作中の主人公を同化してしまわなければならぬ、先生の作ではそれができない。始終作品の後に——作品の上にと言ったほうが可い——作家があるということ意識せずにはいられない。しかし作家はその人格においても、その学殖においても作品

以上だというような心持が離れない。もつともこれはわれわれが先生を知ってるからかもしれないが、誰にしても幾分かそういう心地が起るだろうと思う。これに反してダヌンチオの作なぞを見ると、これはまるで作家を知らんのだからなんともしえないが、どうもその人格なり学殖なりがああ作品以上だとは思われない。そこへゆくと、ツルゲーネフなどでは作家と作品とがしっくり合って、作品以上だとも以下だとも思わない、読んでる間は、作家を忘れ、その作品のへ没了することができる。

作中の人物を上から見下して、知的に取扱うことは、

喜劇の遣方でもあるが、また近代的作物にもこれに似たところがある、だからどちらかと言えば、近代の作物は喜劇的傾向があるともいえよう。この意味において、先生の作物は大いに近代的である。近代的ということを経学的という意味に取れば、先生の作ほど近代的なものは有るまい。ただ、先生の作には不安がない、動揺がない、暗いところがない。科学の光に会って、いつそう暗く、いつそう神秘的に成った不知の影に対する恐怖がない。こういうものを近代的だとすれば、先生の作は近代的じゃない。だから先生の作は近代人の作というよりも、む

しろユーモリストの作といったほうが可い、「猫」はいうまでも無かったが、この「三四郎」や「文学評論」の中で時々見当るユーモアの断片が、ことごとく海の底の宝玉のように天工である。そういう時は毎も先生を日本なぞに置くのが惜しいとおもう。

しかしながら専門のサチリストとしては、先生はあまりに温情に富んでいる。またあまりに他の方面にも長所がある。「猫」は一方に偏して、他の長所が顕われなかった。また作の性質として、どこか故わざとらしいところがあった。「三四郎」にはそんなところがない。いちばん



先生の日常の生活に近いもので、先生が人生に対する態度と、あのリファインした感能上の趣味とを十分に窺<sup>うかが</sup>うことができる。三四郎が途上で出逢った子供の<sup>ひつき</sup>柩の五色の風車がくるくると回るさまは、永く読者の目に残るだろう。こんなふうに美しい光景はまた他にいくらかもある。それで「虞美人草」のように偏した堅いものじゃない。楽に書けてる。「三四郎」は先生の作の中で、最も<sup>すぐ</sup>優れた作だといわないまでも、最も完全な作だといわれよう。

(明治四二・六・一〇—一二「国民新聞」)





日本文学電子図書館

---

「三四郎」

著 者 森田草平

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 6 卷」角川書店

昭和42年7月30日 5版発行

---

日本文学電子図書館